

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 19 日現在

機関番号：26401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23890190

研究課題名（和文）女性若年がんサバイバーのボディーイメージ変調への看護介入方法の開発

研究課題名（英文）Development of nursing intervention method to the change of the body image of young female cancer survivors

研究代表者

石井 歩 (AYUMI ISHII)

高知県立大学・看護学部・助教

研究者番号：80611938

研究成果の概要（和文）：本研究は、若年がんサバイバーのボディーイメージの変調への看護介入方法を女性のがんサバイバーに焦点をあてて開発することを目的とした。文献検討後、8名を対象に、ボディーイメージの変調とコーピング、必要と感じたケアに関して面接を実施し、質的に分析した。分析結果から①治療時の意思決定、②セクシュアリティ、の2つの視点から構成される女性若年がんサバイバーのボディーイメージ変調への看護介入を考案した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to develop a nursing intervention method to the change of the body image, focusing on young female cancer survivors. After reference to the related literatures, interviews were conducted and qualitatively analyzed, covering 8 subjects about the changes of body image, coping actions and cares they thought necessary. Based on the analysis result, a nursing intervention method was invented which is composed of two aspects of: a. decision-making in therapy b. sexuality, in order to cope with the change of the body image of young female cancer survivors.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：7502

キーワード：若年がんサバイバー、女性、ボディーイメージの変調、看護介入方法

1. 研究開始当初の背景

がんという疾患が人々にとって脅威として受けとめられるゆえんは、死を意識せざるを得ないというだけでなく、がんに伴い悲惨な症状が出現すること、またがんそれ自体あるいは治療のためにその人の魅力や個性が失われる可能性が大である（氏家,2006）からといわれている。鈴木（2009）は、身体の外観が損われたり、機能の一部を喪失することは、卑屈な気持ちになりやすくなること、特に容貌についての大きな不安があると、社会生活への不適応を起こしてしまうことを述べており、さらにボディーイメージの変化を受容できない場合は自己存在や価値が揺るがされる体験につながると述べている。これらのことから、がんサバイバーの適応を促していくために、看護職者ががんサバイバーのボディーイメージ変調への介入をすることは重要である。

がんサバイバーのボディーイメージに関する看護研究を外観すると、臓器の摘出や構造・外見・機能の劇的な変化を伴う状況での研究がほとんどであり、多くは患者の体験に焦点が当てられている。看護援助についての研究も近年増加しているが、わが国独自の文化における介入方法や具体的で有効な介入方法は確立されているとは言い難い。そこで、ボディーイメージ変調を「治療によって変化した身体と精神的なイメージが一致せず、戸惑いや困難を感じている状態、すなわち理想身体、現実身体、表現身体のバランスが崩れている状態」と定義し、がん治療によってもたらされたボディーイメージの変調への看護介入を開発することを目的に研究に取り組むことにした。

また、この若い世代は生物学的にも社会的にも性差が目立つ時期であり、性別に応じた介入が必要であることが考えられる。特に女性は成人前期に生殖能力のピークを迎えるので、この時期にがんと診断されることでのボディーイメージの変調は著しいことが考えられ、本研究ではこの世代の女性に焦点をあて、ボディーイメージの修正や強化のための看護介入方法の開発を目指した。本研究の成果は、女性若年がんサバイバーががんとともに生きていくためのその人らしさの回復、さらにサバイバー自身の新しい自分らしさと生き方の獲得を助け、多くの喪失を体験する女性若年がんサバイバーの苦悩を和らげ適応の促進に繋がると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、女性若年がんサバイバーのボディーイメージ変調への看護介入方法の開発を目的に、以下の目標を設定した。

(1)女性の若年がんサバイバーは治療に伴いどのようなボディーイメージの変調を感じているかを明らかにする。

(2)女性の若年がんサバイバーは治療に伴って変化したボディーイメージ変調に対してどのような看護介入の必要性を感じたのかを明らかにする。

(3)海外文献・国内文献から、ボディーイメージの変調に関連する看護介入を抽出し、分類・整理する。

(4)目標 1,2,3 の内容を踏まえて女性若年がんサバイバーのボディーイメージ変調への看護介入方法を考案する。

3. 研究の方法

(1)研究対象

女性の若年がんサバイバー（Adolescent and Young Adult、以下 AYAs）で、研究への理解と協力が得られた以下の条件を満たす 8 名を対象とした。

①15 歳～39 歳である。《NCI（米国国立研究所）の AYAs の定義に基づく》

②何らかのがん治療を受けている、もしくは受けていた方で、診断後、半年以上 2 年以内である。

③身体的・精神的に安定しており、会話による面接が可能であり、自分の思考を言語化して伝えることができる。

④予後 6 ヶ月以内と診断されたターミナル期でない。

(2)データ収集方法

データ収集方法は以下のように行った。

①半構成的インタビューガイドの作成

文献検討と研究の枠組みをもとにインタビューガイドを作成した。インタビューガイド作成後はプレテストを実施し、質問項目の妥当性や面接時間、対象者が語りやすい内容になっているかなどを検討・修正し、洗練化した。

②データ収集

各対象者に対して、60 分程度のインタビューを 1 回実施した。

(3)データ分析方法

①対象者が語った内容から、女性若年がんサバイバーのボディーイメージ変調と、必要と感じた看護介入に関連する部分を質的に抽出した。

②得られたデータをコード化、カテゴリ化し、抽象化を繰り返した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、所属大学看護研究倫理審査委員会の承認後、協力施設の承認を得て実施した。対象者に対して、本研究の主旨・方法とともに以下の原則に基づいて倫理的配慮を行なった。

①正義の原則に基づく倫理的配慮

研究対象者のプライバシーの保護と守秘義務、匿名性の保証、データの保管方法と破棄、結果の公表について説明し、面接の場所や日時は対象者の負担が最小限となるように配慮し、対象者の希望により調整した。

②善行（無害）の原則に基づく倫理的配慮

研究対象者の心身の負担への配慮、対象者に生じる利益と不利益、看護上の貢献について説明し、質問や相談、意見などがすぐできるよう連絡先を手渡した。

③人間としての尊厳の尊重

研究参加と撤回・中断の自由について、さらに辞退したことで不利益を被る可能性はないことを文書を用いて口頭で説明し、研究参加への同意を文書で得た。

4. 研究成果

対象者は、現在も何らかの治療を受けている24歳～39歳の女性がんサバイバー8名であった。既婚者は4名、未婚者は4名であった。

インタビュー内容を分析した結果、女性若年がんサバイバーにボディーイメージの変調を生起するできごととして、【予測できなかった副作用の出現】【予想以上の苦痛】【親しい人の思いがけない反応】【女性らしさの喪失感】の4つが抽出された。

(1) 【予測できなかった副作用の出現】

これは、対象者が治療後に自分の身体に起こる変化を前もって予測できていなかった、気持ちの準備ができていなかった副作用が出現したことである。

例えば、「飲み込めないほど唾液が増える (Case3)」「食事は減っているが体重が増える (Case1, 5)」「性交時に強い痛みがあった (Case2, 6)」の語りのように、対象者が事前に予測できていなかった症状が出現したことから、ボディーイメージの変調が生起していた。

(2) 【予想以上の苦痛】

これは、事前に情報を得て、理解していた治療後の症状や身体の変化であっても、身体的・精神的な苦痛が自分の想像をはるかにこえていることである。

例えば、「死ぬんだろうか (Case5, 6)」「宇宙人になったんじゃないだろうか (Case5)」の語りのように、発熱や下痢、嘔吐など、出現するとわかっていた症状でも、起き上がることさえできず、自分のコントロール感が失われてしまうような苦痛から、自分の身体の変化に強い恐怖心や不安を感じ、ボディーイメージの変調が生起していた。

(3) 【親しい人の思いがけない反応】

これは、治療後の自分の身体の変化に対して、身近な人が思ってもみなかった反応をすることである。

例えば、「(体重が増えて) 会うたびに(職場の人から)『本当に病人?』って。むくんでるんです、薬の副作用なんですって言うんですけど (Case5)」の語りのように、親しい人から変化した身体について話題にされたり、言及されことなどから、ボディーイメージの変調が生起していた。

(4) 【女性らしさの喪失感】

これは、がんという病気そのものや治療から、女性としての自己を奪われたと感じることである。

例えば、「もうこの身体は見せられないですよ、異性には。ひくだろうなあって思います。だから、男でもないし、男になったわけでもないし。誰かとこれから先付き合っっていうのは多分ないだろうなって思って (Case5)」「赤ちゃんがほしくて治療をやめていたけど、その間に再発したので。結局、子どもを諦めないといけなくなったので (Case3)」「家を継ぐ、ではないんですけど、名前を残すっていう、(尊敬していた自分の)父親の存在を残してあげたいなっていうのは考えたんですけど (Case5)」の語りのように、希望していた結婚や妊娠・出産が治療によって難しくなり女性性を失ったと感じたことから、ボディーイメージの変調が生起していた。

ボディーイメージの変調を感じた期間や内容は様々であったが、今回の研究の対象者は全員なんらかのボディーイメージの変調を経験していた。また、事前にわかっていたボディーイメージの変化に対しては、「脱毛があると聞いた時にウィッグを準備した (Case4, 5, 6)」「髪が抜けると聞いていたので坊主にした (Case6)」のように、対象者全員が医療者やインターネットなどで情報を得ながら、精神面も含め、高い準備性で治療に望んでいることが見出された。

さらに、治療後は「洋服に合わせてウィッグも選んでいる (Case6)」「意外に似合っていた (Case5)」「髪の毛は抜けてもまた伸びてくる (Case4, 5, 6)」と語っており、自分

の中で折り合いをつけながら対処していた。また、Case5は、乳房再建後になかなか自分の身体の変化が受け入れられなかったが、友人との温泉旅行で「向かい合わせに湯船につかっている、今までと変わらないっていう接し方だったから、別に変じゃないんだって思えました」と語っており、周囲の人の肯定的な評価が変化した自分自身を受け入れ、折り合いをつけていくきっかけになることも考えられた。このように、女性若年がんサバイバーは、元来、対処力が高いこと、さらに治療前後に医療者やパートナー、友人に相談しながら準備性を高めて治療に臨んでいる。また、社会や家族のなかで病気と向き合い、役割を継続する中で対処力をさらに高めていることが考えられた。

必要と感じた看護ケアでは、【治療時の意思決定支援】【セクシュアリティへのケア】が抽出された。

1. 【治療時の意思決定支援】

「説明の時に、私の顔も見ずに（乳房を）とらないといけないといわれて、男の先生に女の気持ちがわかるかって（Case5）」「子どもが欲しいっていうのは先生にも伝えていたので、一度（治療を）辞めるというのは自分で決めたんですが、（中略）もう少し情報があれば慎重に考えたかな（Case3）」の語りのように、女性若年がんサバイバーは治療によって、ボディイメージの変調が予測される時には、生存率の視点だけでなく、外観の変化、妊孕性や女性らしさも含めた意思決定の支援が欲しいと感じていることが見出された。

2. 【セクシュアリティへのケア】

既婚・未婚に限らず、治療に伴う身体の変化から、対象者はパートナーとの関係性や夫婦生活についての悩みや戸惑いを感じていた。パートナーとの性生活がなくなった、または性生活をしたいと思えなくなったことから「夫には本当に申し訳ないなって（Case3）」のような語りもみられた。パートナーと相談したり、婦人科を受診するという対処行動を取りながらも、「みんなどうされているのか、若い分ですね。それで夫婦関係がうまくいかなかったりっていうのもあるんじゃないかな。（Case3）」のように、パートナーとの関係性を含めてセクシュアリティへの支援が欲しいことが見出された。

女性若年がんサバイバーは、がん治療に伴って出現する様々な症状や外観の変化にボディイメージの変調を生じることがあっても、周囲の人の力もうまく活用しながら、自己の力で対処していくことができていた。

しかし、この世代は、結婚・出産などライフイベントの多い時期でもあり、ボディイメージの変調を伴う治療法の決定や、セクシュアリティに関する問題に関しては、サバイバーの人生そのものが影響するため、対処していくことが困難な場合もあることが考えられた。

今回の結果と文献検討結果を踏まえて、【治療時の意思決定】【セクシュアリティ】、の2つの視点で「女性若年がんサバイバーのボディイメージ変調への看護介入」を考察した。しかし、分析を進める中で若年がんサバイバーは、周囲との関わりの中で自分のボディイメージを修正し、今の自分自身を肯定的に捉える力を培っていることが考えられた。そのため、看護介入には患者自身のもつ力を含めたアセスメントが必要であり、今後は若年がんサバイバーのボディイメージの変調に特化したアセスメント項目や介入方法を具体的にしていく必要がある。

5. 主な発表論文等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 歩 (ISHII AYUMI)
高知県立大学・看護学部・助教
研究者番号：80611938